

三毒退治のことはりなるよし、晴明が篋篋内傳に見え侍れど、これ又妄誕の説なれば、豈信するにたらんや、但もろこしにて除夜元日などに爆竹する事あるをまなびて、我國には今日するならし、春の始なれば、一年の邪氣をはらひ散せる意なるべし、吳の俗、十二月廿五日爆竹するよし、范至能が説にみえ侍れば、あながち除夜元日にのみする事にてもあらざるべし、凡爆竹の聲は、陰氣の鬱滯せるを發散し、邪氣を驚かしむるとなり、神異經にいはいはく、西方深山中有人焉、長尺餘、犯人則病寒熱、名曰山臊、其音自叫、人嘗以竹著火中、燂焮而有聲、山臊皆驚憚、又朱子語類に、或人はいはい、郷間に李三といふものあり、死して厲となる、郷曲凡祭祀佛事あれば、かならず此人のため、別に饌具をそなふ、若かくのごとくせざれば、齋食盡く爲所汚、後に人ありて、爆竹を放てその所依の樹を焚、是より遂に絶てやみぬ、朱子のいはく、是他枉死氣未散、被爆竹驚散了、又焦氏筆乘に、李旼該聞集を引ていはく、爆竹、妖氣を辟事信然たり、郷人に仲叟といふものあり、山鬼のため、に祟をなされて、戸牖を開く事あたはず、山鬼まきりに瓦石を投て妨をなす、叟、巫覡を求めてこれをいのりければ、却て妖祟をなすこといよく、さかんなり、旼これに謂ていはく、日夜庭中におゐて、除夜のごとく爆竹する事數十竿せよ、叟その言を然りとして、爆竹して曉にいたる、これより妖祟の事やみしとなん、この數説を以て見れば、爆竹の邪氣を辟る事、其理あり、まゐるがたし、

〔改正月令博物筌 正月十五日 三毬打〕左義長ともかく、正月に打たる、毬打玉を、真言院より神

天地人に表し、やき上る也、唐は陽をまつる也、今の世民間には、正月のかざり松竹まめのはの類をや、く是をといふ、いふも唐は元日に竹をやく竹のやくる音にて、陰氣はらひ、妖邪のがいのをぞ、くとも、本朝、爆竹ばくちくともよむ、又竹をやくは、吉書上る書、初日やくきな、ひし花びらほこ

なるべし、はこらす、む故、いふなるべし、

〔稅苑日涉〕民間歲節上、是日正月十五日取門松及司命索、積庭中、豎竹於其四傍、燎之、謂之散鬼、杖杖

如、兆、蓋、爆、或謂之焯度、焯度、國語、猶言、焯、焯也、火、熾、貌、事物紀原曰、歲時記曰、元日爆竹於庭、以辟山臊、山臊惡鬼也、